第９号
令和５年６月２０日（火）
四日市市立塩浜中学校
（文責）　学　校　長

塩中だより

≪教育目標≫　人間性豊かで、創造力・実践力に富む生徒の育成

修学旅行で学んだこと

6月7日（水）～9日（金）3年生は、4年ぶりに広島方面へ出かけることができました。この修学旅行では、世界遺産を訪れたり、平和学習や防災学習をしたり、USJ で仲間との絆を深めたり内容の濃い3日間となりました。今回の「塩中だより」では、それらの中から私たちが学んできたことを紹介します。

広島平和記念公園にて被爆ピアノで合唱しました

１日目の夕刻、お好み村で広島焼きに舌鼓をうった後、平和を祈念するセレモニーを行うために平和記念公園内へ移動しました。会場に着いてビックリ！そこは対岸に原爆ドームを臨む元安川のほとりで、被爆ピアノはもちろん集音マイクやスピーカーなどの立派な音響設備がスポットライトに浮かび上がっていて、まるでテレビ番組のロケ地のような光景でした。

被爆ピアノとは、原爆投下時、爆心地より３km 以内で被爆したにもかかわらず現存しているピアノのことで、今回お話をうかがった矢川ピアノ工房さんには６台残っているらしく、２００１年から全国各地へ平和の音色を届けています。過去には雪の降るなか菰野町にも来てくれたそうです。矢川さんは、今回のセレモニーで合唱した「ヒロシマの有る国で」を作詞作曲した山本さとしさんと知り合いだそうで、「この曲を歌ってくれて大変うれしいです。」と言ってくださいました。

合唱は「群青」という曲と合わせて２曲歌いました。歌い終えるころには観光客など偶然そこに居合わせた人々から自然と拍手が沸き起こりました。合唱の後、実行委員さんの「黙とう」の言葉を合図に１分間の黙とうを捧げました。それまでみなさんの方を見ていた矢川さんや他スタッフの方が、サッと川の方に振り返りみなさんと一緒に静かに黙とうする姿が印象的でした。目の前には、７８年前の８月６日、原爆の熱線に焼かれ水を求めてやってきた人々が２重３重に折り重なるように埋もれた水面が静かに広がっていました。

被爆体験を聞きました

２日目の朝、広島平和記念資料館で原爆の脅威について学習した後、追悼平和祈念館で飯田國彦さんの被爆体験を聞きました。飯田さんは、３歳のとき爆心地からわずか 900m のところで被爆して奇跡的に生き残ったいわゆる被爆孤児です。当時まだ幼い飯田さんの記憶が鮮明に残っていて、今でも夢でうなされるということです。講演の途中、当時の惨状が思い出されたのか、飯田さんが時折感極まりながら語る姿には胸をうつものがありました。戦争を知らない私たちには想像もできない地獄を見てきた飯田さんが私たちに強く訴えていたことは、「自殺なんかしてはいけません。どうか自分の命を大切にしてください。」ということでした。

神戸で防災学習をしました

２日目の午後、新幹線で神戸に移動した私たちは、人と防災未来センターを見学しました。1995 年に起きた阪神・淡路大震災の経験と教訓を後世に伝え、これからの備えを学ぶ災害ミュージアムです。被災者の方から提供された震災関連資料展示などからこの震災がどのような災害だったのかを知ることができました。特に、震災は今後起こるものとして捉え、非常時に少しでも被害を少なくするために一人でも多く助かるように、私たちがすべきことである「減災」を考え、備えることの大切さを学びました。

今回の修学旅行で学んだ平和学習や防災学習をはじめ、ふだん学校の道徳の授業などで勉強する差別事象や人権問題を振り返ると、結局どれも行きつくところは、「(自分も含め)人の命を大切にする」ということではないでしょうか。改めてこのようなことを考えていたら、ふと被爆孤児である飯田さんの言葉が心によみがえってきました。